師匠と一夜

ワンナイト・ホラー　１

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18789800

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 芹霊, もぶお兄さん×霊幻, ♡喘ぎ, モ腐サイコ小説100users入り

ワンナイトしまくってる師匠が相談所のメンツにバレて泥沼化する話です。モブお兄さんが出張りますが、敗北前提なのでご了承ください。なお攻めの倫理観がアレとなっております。お好きな方はよろしくお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

みーくんの名前を好きな名前に変えて読める夢もぶお兄さん小説を作成しました……良ければお楽しみください（非会員でも読めるようにしてあります）
ワンナイト・ホラー　１ https://pictbland.net/items/detail/1932697?utm_source=twitter

ワンナイト・ホラー　1

〜Side霊幻新隆〜

「無精子症です」
「……は」
俺よりも、婚約者の彼女が凍り付いたのを、よく覚えている。
美人じゃないが、気立てのいい大好きな彼女だった。
その彼女と受けた、ブライダルチェックで。
俺の男としての、人生は終わった。
何も問題が無かったはずのお付き合いは彼女からの強烈な拒否により破談になって。
子供は２人は欲しいね、って言ってたはずの俺と彼女の新居は、気がつけば俺１人でタバコをふかすだけの部屋に成り下がっていた。

俺は、結婚というもの自体を諦めた。
だってさ。
精子ないんだもん。

乾いた笑いが出る。勃起して射精すんのに、空っぽなんだぜ、その中。
なんのための機能だよ、コレ。

まあさぁ。
何の言い訳にもならないんだけど、でも言い訳にさせてもらってもいいぐらいにはショックな話だと思うんだけどさ。

それから俺はただれた夜を送っていて。

最初は行きずりの女と寝て。
でも付き合う付き合わないでモメてからは、もっぱら男とばっかり

憂さ晴らしに寝るようになって。

今日も楽しいワンナイトだ。

いつも男漁りをしているバーで、『レディーキラー』という真っ赤なノンアルコールカクテルを舐めながら客を物色する。俺からも『今夜ＯＫ』のサインを出しつつ、お仲間がいないかカクテルの色をチェックしていく。
「霊幻さんじゃん。今夜フリー？」
「みーくんか」
そうこうしていると、髪を明るい茶色に染めた人懐っこい顔見知りが隣に座った。
２０歳くらいのみーくんは、タチ専門でウリをしているイケメンだ。
この子、プロなだけあって、セックス上手いんだよな。
この子でもいいな、今日はタダで抱いてくれる気分だろうか。
「フリーだよ」
「やりぃ！どう、俺を買ってくんない？」
うーん、そう来たか。
「金無い」
素直に答える。買うつもりも無いのに、引き止めるのも悪いしな。
「じゃあさあ、また相談のってよ。それにマッサージもして欲しい。代金はそれで良いよ」
うう〜ん、どうしようか……。
「それだと、２万ぐらいの価値しか無いぞ。損になるんじゃないのか？それに、生活大丈夫なのか？金が必要なら、ちゃんと仕事した方が」
……キスされた。
あー、みーくんキス上手いな……頭がジンジンしてくる。
あ、やば……
「……っ、勃つから、やめてくれ」
そう言ってぐいっとみーくんの肩を押す。
「……可愛い」

トロけるイケメンスマイルを食らってしまった。
「お金なら、稼いでるから気にしないでよ。気に入らないなら、いーよ、ロハで抱いてあげる。だからセックスしよーよ、霊幻さん」
そういうわけにはいかない。
「何か相談したいことがあるんだろ？それは聞くよ」
バーのマスターにカルボナーラを注文する。
「俺の好物、覚えててくれたんだ」
「仕事柄、そういうの忘れねぇんだよ」
しばらく雑談していたら、カルボナーラが運ばれてくる。
ちょっと悩んでから、みーくんはカルボナーラをがつがつと食べ始めた。
「みーくん、背筋を伸ばして。フォークは、こう持つんだ」
「……うん」
みーくんは、育児放棄されて育ってきた子だ。食べ方も独特で、直して欲しい、と前に頼まれていた。
「この書類なんだけどさ」
みーくんは『夜間中学案内』と書かれたパンフレットを出してくる。
「読んだけど、書いてあること正しいの？俺、騙されてない？」
──イケメンのみーくんは、当然美少年のみーくんだった時代があって。信じられないような搾取のされ方をされてきた。
「見せてくれ」
パンフレットを注意深くチェックする。夜間中学を勧めたのは俺だ。責任も感じていた。
うん。ちゃんと役所が発行している、しっかりしたパンフレットだ。
「大丈夫だ。どうだ、行ってみるか？」
「うん、俺、勉強したい。これ以上騙されたくねぇもん」
ぎこちなくカルボナーラを食べながら、胸が締め付けられるようなことを言う。
「じゃあ、役所に行くだけだな。大丈夫だ、役所の人が親切に……」

ぽた、とみーくんが一気に脂汗を流す。
「……いや、俺がついて行く。いつだったら行けるんだ？教えてくれよ」
ちょっと相談所を抜けたら済む用事だ。ここまで首を突っ込んだなら、最後までやるべきだろう。
「……役人なんてクソだ」
「俺が守ってやるから」
みーくんの家庭に入っていた支援員に。
みーくんはずっと性的な乱暴を受けていた。
誰もみーくんの言う事を信じなかった。素行の悪い嘘吐きな少年の言う事と、公務員の嘘だと、公務員の方が信じられてしまった。
無関心だった母親は助けてくれるどころか、暴行されている映像を撮って売っていた。みーくんの地獄には、役所が絡んでしまっていた。
でも世の中の人が全てみーくんから搾取しようとしてる訳じゃ無い。
助けてくれる人もいる。
それを、少しずつでもいいから、知って欲しい。
「……いつでもいいよ。俺、昼間はヒマだもん」
へへ、と子供みたいにみーくんが笑う。
「俺に父ちゃんがいたら、霊幻さんみたいに助けてくれたのかな」
無精子症のことを思い出して酷く傷付くと同時に。
救われた気分になる。
「俺はお前の父親がわりにはなれねーよ。けど、少しは助けになれる。それだけの他人だ」
「……お人好しだよね。騙されたら言ってよ。俺が殴って半殺しにしてやっから」
みーくんはヤクザの下っぱ扱いもされてる。
「みーくん、人を傷つけちゃダメだ。損しかしないぞ」
みんなみんな、みーくんから奪うばかりだ。
あー。
俺も、な。
性的搾取、してる。

……どうも、気分が削がれた。
「みーくん、これ、俺のメアドと電話番号な。役所に行く時、連絡してくれ」
カルボナーラ代を払って席を立とうとする。
「えっ霊幻さん、どうしたの？」
「やっぱりタダで抱いてもらうのは悪いよ。プロなのにさ」
「カルボナーラ奢ってくれたじゃん！！相談にものってくれたし！！」
「でも５万にはほど遠い」
「もー、俺、今日は霊幻さんの中で射精する気になってんだからさ、萎えること言わないでよ！俺、霊幻さんとセックスしたい！！霊幻さんは俺としたくないの？」
子犬みたいな目で見られて、うっと言葉につまる。
「俺がめちゃくちゃ上手いの知ってるでしょ？また涙止まんなくなるまでイカせてあげっからさぁ」
うう……欲が、むくむくと頭の中で膨らんでいく。
「ヤろうよ、霊幻さん」
そもそもヤリたくて仕方なかった俺は、あっさり陥落した。

※

「仕事柄かな、変な所凝ってるな」
ラブホで、裸になったみーくんのマッサージをする。
内股とか、二の腕とか、普通の人はそうそう凝らない部分が固い。
「あ゛ー、ぎもぢいー」
ふにゃふにゃとみーくんは切れ長の目をとろけさせてマッサージを堪能している。
「ねー、れーげんさん、これで俺についてる呪いも取れないかなあ？」
「みーくんの呪いに必要なのは、役所の、しえん、だっ」
背中を押しながら答える。
「あと、お母さんは病院に連れてけ。前から言ってるだろ」
「ゔー……」

酷いアルコール中毒になってしまっているみーくんの母親は、錯乱して暴力を振るうまでになっていた。みーくんは身体も顔も商売道具だ。なのに、そこにアザを作ってくる母親には、もはや入院治療が必要だろう。
「でもさ、母ちゃん、入院は寂しいって、言うから……」
「……」
優しい子なのだ。
だから搾取される。
「酒も、やめるって、言ってるし……」
信用できるか、そんなもん。でも可哀想で言えない。どうしたもんかな。
「お母さん、悪い霊が憑いてるかもな。今度良かったら除霊コース頼んでみねぇか？」
「……ほんと？霊幻さん、お願い」
あー、俺も、みーくん騙して。
でも騙してでも、解決しなくちゃならないことだ。
なんとかみーくんを地獄から解放したい。
ワンナイトを繰り返して、少し情が移っていた。
「この霊幻新隆がっ、引き受けたっ」
ごりごりとマッサージを続ける。
ぴぴぴぴ、と携帯のアラームが鳴った。
「はー、気持ちよかった。じゃあ今度は俺が霊幻さんを気持ち良くしてあげるね♡」
ニヤリとみーくんが笑う。
あ。
喰われる。
──その予感に、ゾクゾクと気持ちのいい悪寒が走った。
「……っは、……ん、」
キスで上顎を責められるのが気持ちいい。
みーくんはキスしながら、器用に俺の服を脱がせていく。
「っあ！ん、んっ……」
するりとズボンを脱がされて、下着に手を突っ込まれる。
もう期待しまくってビンビンの性器を握られて、腰が跳ねた。

「メスイキしやすいように、一回イっとこうね」
甘いみーくんの声にこくこくと頷く。あー。気持ちいいの、大好き。
「ん、んっ、あっ、そろそろっ、」
くちゅくちゅと鈴口を親指でくるくる撫でられて、下半身に何度も甘い衝撃が落ちてくる。
「ピクピク震えちゃって、可愛いね。もう身体ピンク色じゃん。気持ちいい？霊幻さん」
「気持ちいい……イくっ……」
みーくんの手にびゅるびゅる射精して、じぃんとした絶頂を味わう。
みーくんは俺の下着を脱がせて、ついでに自身にコンドームを付けていた。
「霊幻さんもう準備してきてるでしょ？ふわふわのアナル、いじめさせてよ」
「ん」
みーくんにエスコートされながら、ベッドに押し倒される。
「あ……」
ゆび、きもちいい。
「んんっ、ふぁ、きもちぃ、」
身体のナカから押し上げられる違和感が甘い痛みになって腹に響いてくる。
「れーげんさんも」
手をみーくんのちんこに誘導される。
おっきい……
ごくんと喉が鳴る。これでいっぱい突いてもらえるんだ。たのしみ……♡
欲を込めてこすこすとみーくんのちんこをいじる。
「れーげんさん、目がハートじゃん。そんなに俺のチンポ好き？」
「大好き……♡」
びくんとみーくんのちんこが跳ねる。
「……っ、ほんと、ワザとやってる？」
「？」

「……かわいーね、れーげんさん」
指が増える。
「あぁっ、あっ、」
手コキしながら、腹の中の指に集中する。きもちいい。きもちいい。
「３本入るよ」
「ん、っ……」
圧迫感に息をつめる。
ぬぽぬぽとゆっくり抜き差しされて、ほぐれていくのが自分で分かる。
「ふ、ぁ……」
きゅ、と内部を締め付けて、反動で起こる甘い痺れを楽しむ。
「きゅうきゅう締め付けて、やらしーんだ」
みーくんの言葉責めにくらくらする。
「だって、きもちい……♡」
「……っ」
俺の表情を見て、みーくんの喉が鳴る。そんなにはしたない顔してんのかな。
「ごめん、もう、挿れていい？」
「うん……♡」
四つん這いになって、腰を突き出す。
「あ……っ！」
ずぶん、と一気に突き入れられて、頭まで走った電流に促されるまま、トコロテンした。
カリが。
前立腺、当たってる。
そのままズンズン突かれて。
「〜〜〜〜〜〜〜っ！」
声にならない悲鳴が出た。
気持ち良すぎて脳が焼き切れそうだ。
デカチンポ最高っ♡
がくりとひじが折れる。
支えて貰わないと、腰もくだけそうだった。

「はうっ♡あんっ♡あぁっ♡あぐぅっ♡」
あ、きた、きた、くる。
「いくっ♡いくぅっ♡みーくん♡みーくんっ♡」
熱い快感が骨盤の中で弾けて。
全身を強い幸福感が満たした。
「あ♡あ♡あう♡ああああっ♡」
みーくんは分かって腰を振り続ける。絶頂から降りれない。
発狂しそう……っ♡
「いぐっ♡きちゃうっ♡……っあああああああああ！！！！」
性器をこすられたけど、精液が出なくて。
前立腺とダブルで責められて、ちんぽでメスイキした。
身体のナカで怒張がドクンドクン精液を吐き出す感覚に酔いしれながら、目の前がホワイトアウトする。
絶頂の快感の波が何度も押し寄せて、じわんじわんと熱の痺れが広がっていく。
「あ、ひ……♡」
だらしなくセックスの気持ちよさを味わう俺を、優しい手が撫でていった。

※

「じゃ、絶対連絡するから」
ラブホの前でニッと笑うみーくんにヒラヒラと手を振る。
「良かったぜ」
「じゃ、またヤろーよ」
「ああ、頼むわ」
ちゅ、とみーくんがバードキスをしてくる。イタズラ好きめ。
軽くため息をついてきびすをかえす。
と。

芹沢と、目が合った。

「……は？」

芹沢の喉から低い低い声が怒声となって落ちてくる。

そこに居たのは、先日、『男は恋愛対象にならない』と言って振ったばかりの、部下だった。

続